

寂聴先生へ

本田 耕一

今年の夏は耐え難い猛暑でした。気象庁が観測を始めてからの記録が毎日のように更新され、気温が31度とか32度は涼しいと感じるほどです。

フランスのパリではオリンピック、パラリンピックが開催され、日本選手が活躍してたくさんのメダルを獲得しました。

例年のように台風も襲来し、熱帯地方のような土砂降りの雨も度々です。8月には宮崎県沖で大地震が発生し、南海トラフ地震臨時情報」が初めて出され、備蓄買いで水や米が品薄になりました。阿波踊りは、コロナ禍後の本格的な開催となり外国人も含め多数の観光客が来県して賑やかでした。NHKでは紫式部を主人公にした大河ドラマが放

映されています。

日本での日常は円安による物価高などもあり庶民は相変わらず厳しい生活です。複合的な要因からコメ不足になり、スーパーの売り場に商品がなくなるといった事態もありました。それでもひとびとは毎日をそれなりに楽しみも見つけながら生きているように思います。

世界はきな臭く不条理なことばかりです。ロシアがウクライナに侵攻して始まった戦争はもう2年半が過ぎ、かつて専門家が指摘していたようにこの戦争が10年続いても不思議ではないという言葉が現実のものになりそうです。

昨年10月7日にはガザのパレスチナ戦闘員がイスラエルに越境奇襲攻撃を行い、それに対する報復と自衛権の行使

としてイスラエルが大規模攻撃を始め、無差別といえるほどの殺戮が続いています。今も世界のどこかで人と人が殺し合いをしているのです。

2001年9月11日にニューヨークの世界貿易センタービルに旅客機を突入させるテロが発生し、アメリカのブッシュ政権は首謀者を匿っているとしてタリバン政権のアフガニスタンにかつてない空爆をしました。タリバン政権は瞬く間に崩壊、アフガニスタンは混乱に陥りました。翌年にはブッシュ大統領はイラクに大量破壊兵器があるとの口実で攻撃を仕掛け、フセイン政権を倒壊させました。イラクもカオスとなり、テロ活動はやまず、アメリカ軍などが今も駐留しています。

先立つ1991年2月にイラクがクウェートに侵攻した湾岸戦争では、多国籍軍がイラクへ猛烈な空爆をして撤退させました。混乱したイラクでは国民が食料を奪い合い、とりわけ医薬品、粉ミルクが不足して子どもたちが命を落とす危機となりました。先生は開戦当初から戦争に反対し、断食をされました。その後は寄付を募り、戦闘が終結したイラクへ危険を顧みず自ら物資を届けられました。命はかけがえないものだ。殺すなかれ。殺させるなかれ。とい

うお釈迦様の教えを実践されたのです。「いい戦争は絶対ありません。戦争はすべて人殺しです。」先生は何度も訴え続けておられました。

今年の7月28日に徳島市内で、「ガザとは何か」21世紀のホロコーストと私たち」と題した講演会が開催されました。講師は早稲田大学文学部学術院教授の岡真理さんでした。イスラエルとパレスチナの問題については新聞やテレビの報道で概略は知っていましたが、なぜこんなに長く争いが続くのか、ガザでは本当は何が起きているのかを知りたいというのが参加の動機でした。

岡教授は東京外国語大学アラビア語科を卒業し、エジプトのカイロ大学に留学経験のある現代アラブ文学、パレスチナ問題の専門家です。

はじめに話されたのは、ガザの地理的な位置、そして4000年にわたるかの地の歴史でした。ヘレニズム（ローマ）ビザンツ（アラブ・イスラーム）十字軍（オスマントルコ）現代に続く、人類の諸文明の重層的な歴史を証言する場所としてのガザ、多民族共生の土地としてのガザについてでした。

昨年10月に、ハマス主導によるガザのパレスチナ戦闘員がイスラエル領内への越境攻撃を行い、対抗としてイスラエルのガザに対するすさまじい攻撃が始まりました。過去の攻撃とは比較にならない苛烈さで、すでに4万人以上の人が殺されています。岡教授は、現在起きていることはジェノサイド（大量殺戮）にほかならないと強調されました。ハマスの戦闘員がイスラエルの民間人を殺害し人質をガザに連れ去ったことは、もちろんやつてはならない犯罪ですが、国連のグテーレス事務総長が発言しているように、「ハマスのテロは、真空状態で起きたわけではない。」とのことです。

なぜ越境攻撃が起きたのか。背景としてイスラエルの建国以来半世紀以上に渡る、国際法違反のガザ占領や封鎖によるパレスチナの人々への絶え間ない暴力があります。2007年からのガザ完全封鎖後は、生きながらの死を強いられているのです。生活のすべてにおいて、ユダヤ人至上主義の下、パレスチナ人は自由と平等と人間の尊厳、自己決定権を奪われてきたのです。これは、かつて南アフリカで行われた「アパルトヘイト」そのもののなのです。

イスラエルは、長年にわたり数え切れないほどの戦争犯

罪、国際法違反、安保理決議違反を続けてきましたが、国際社会はひとたびも裁くことはありませんでした。それは、国連におけるアメリカ合衆国の拒否権が大きな意味を持ちます。侵略戦争を始めたロシアに対しては厳しい制裁を科しながら、イスラエルにはいかなる処罰もせず支援をしているのです。欧米諸国のダブルスタンダード（二重基準）は、グローバルサウスをはじめとする開発途上国の深い不信感を招いています。

イスラエルのパレスチナ占領、ガザの封鎖がいつまでも続くことに、日本も加担しているとも教えられました。日本の主要メディアはガザで深刻なジェノサイドが起きていることを積極的に報じません。そしてそれらを鵜呑みにして他人事のように無関心な私たちは、パレスチナの人々の命が奪われることを黙認しているのです。

今ガザで起きていることは、かつてナチスドイツが行ったユダヤ人に対するホロコーストと同じことです。武装しているようがいまいがパレスチナ人を大量に殺戮し、飢餓に陥れ、水の供給を絶ち、病院や学校、避難施設までも容赦なく爆撃することによってパレスチナ社会を組織的に根こそぎ破壊し、「パレスチナ人」という歴史的存在そのもの

を抹消することを最終目標にしていることは明らかです。

訴えるようなそれでいて冷静な口調で3時間の講演会を岡教授は終えられても、まだまだ話し足りない、伝えきれない様子でした。熱い講演を聴いて私は自分の無知を恥じ、無関心ではいられないと心が急きました。

後日私は岡教授の本を中心に数冊の書籍を買い求めました。そのうちの一冊、現代詩手帳5月号は「パレスチナ詩アンソロジー 抵抗の声を聴く」と題した特集でした。「わたしが死ななければならぬのなら」「人間―動物の日記」と作品を読み始めて、目頭が熱くなり、鼻水が滴り、嗚咽で読み続けられなくなりました。それらの詩の中から、ガザ市生まれの詩人ヤヒヤ・アシユールさんの作品を紹介したいと思います。

ガザ封鎖下

ガザ封鎖下で

あるとき思う

僕らはボートに乗っている

僕らを取り巻く世界のすべては

魚だ

また別のとき 僕らは見る

僕らは密林にすぎない

僕らを取り巻く世界のすべては

狙撃手なんだ

もう一編、ヤヒヤさんの詩を紹介させていただきます。

突然僕は絶望を思い出した

親愛なるお空さま、あなたはどこにいらつしゃいますか？

僕らの家が爆撃されている、そのあいだに

親愛なる海さん、あなたはどこに？

僕らの体が黒焦げにされている時は

天井のない監獄といわれる完全封鎖されたガザで生きるということとは、岡教授が話されたようにおよそ「人間の生ではない生」を強いられているということです。イスラエ

ルによる「占領の暴力」が続く限り、パレスチナ人による「抵抗の暴力」がなくならないことを認識させられました。

南アフリカの反アパルトヘイト闘士、故ネルソン・マンデラ大統領が「私たちの自由は、パレスチナ人が自由にならない限り完全なものにはならない。」と語っているように、自由と民主主義を尊重する日本はパレスチナの現状にもっと真剣な関心を寄せなければなりません。

長々と報告文のような手紙になってしまいました。

人生は苦だ。無常だ。それでもこの世はこよなく美しい。というお釈迦様の言葉を何度も寂聴先生から教えられました。その意味を噛みしめて無力な自分にできることを問いつつながら、与えられた生を全うしたいと思います。